

プロログ

二〇三一年、六月――。

山々に囲まれた広大な敷地を誇る近代的な建物。

それに併設されるように大きなライン工場があった。その面積約五万平方メートル。東京ドームとほぼ同じサイズの広さだった。

外壁には「未来カンパニー株式会社」の文字とMの字を模ったロゴがある。そこには千人を超える社員、エンジニアが働き、製造ラインでは次々と人間を模った骨格が流れてくる。

それらに部品を組み込む者、または溶接をする者。さまざまな工程を施していく。骨格は全てチタン合金で出来ており、銀色に眩しく輝

いていた。

製造ラインは休みなく動き、製造担当の社員は三交代制でローテーションされている。

その日も問題なくラインが動いていることを確認しながら、原田はゆっくりと工場内を歩いていった。エンジニアたちの目は真剣で、少しの狂いも許されないと、賢明に作業を続けていた。

原田はこの工場の生産担当長を任されており、工場長よりも責任のある役職を担っていた。工場で製造され、仕上がった商品「マリア」を検査し、発送するまでを取り仕切るのが彼の担当だった。

工場内を視察し終えた原田は、その奥にあるドアを開けて、出来上がったマリアを一時保管しておく、保管倉庫へと足を踏み入れた。そこには一〇〇〇体を超えるマリアが貯蓄されており、その光景は圧巻だ

った。

それらを全て検品して、客先へ発送しなければならない。気が遠くなるような作業だ。もちろん原田一人では出来ない。そこにも五〇人を超えるスタッフが働いていた。

マリアは発売以来、その業績は右肩上がりを続け、生産が追い付かないほどのヒット商品になった。

原田はそんなマリアたちを厳しい目で見つめながら、スタッフの仕事ぶりも監視していた。

「問題はないか？」

傍にいたスタッフに声をかけた。

「はい、問題なく進んでいます」

その言葉に無言で頷く。

彼は歩きながら、一体一体、マリアを見ていく。そんな彼の目が陰しくなったのは、その時だった。小走りにそこへ走る原田。青ざめた表情で、その場を見つめて息を呑んだ。

「おい、片桐を呼べ」

傍にいたスタッフに原田は言った。すぐに検査長の片桐が走ってきた。

「はい、なにか？」

「ここに保管してあったマリアをどこへやった？」

尋常ではない原田の顔を見て、片桐は焦りを覚えて「ちょっと待ってください」と言って走っていった。

その間、原田は気が気ではない様子で、あったはずのマリアの行方を案じた。すぐに片桐は戻ってきた。手にはA4サイズのファイルを持っている。

「えーと、昨日発送されています」

片桐はそこに挟まれた書類を見ながら言った。

「なに！ あれを客先へ出したのか？」

そう言っただけで、片桐が持っていたファイルをひたたくように取り上げて、自分の目で確認した。

「まずいぞ……」

原田はファイルを片桐に返して、走り出した。

「バカヤロー！」

会議室で営業部長、川口が怒鳴りつけた。叱責されているのは原田だった。

「申し訳ありません」

「なんてことをしてくれたんだ！　どうしてそんなことになったんだ」

「はい、不具合の原因追及のためのデータを取っておきたいと思ひまして……保管してました。それを誰かが間違えて発送したようです」

そこには川口と原田の他には誰もいなかった。

「間違えて、だと？　あんなものが世間に出て、またトラブルを起こしてみろ、俺のクビが飛ぶだけじゃすまない。今度こそ我が社は終わりだぞ」

「申し訳ありません」

原田はまた頭を下げた。

「とにかくすぐに、どこへ送ったか調べるんだ。すぐにだ、急げ！」
「はい」

返事をして原田は会議室を飛び出していった。